

令和元年6月10日現在

機関番号：32660

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02353

研究課題名(和文) 初期米文学におけるDutch認識の成立と展開：多様性の起源としてのピューリタン

研究課題名(英文) Recognition of Dutch in Early American Literature: Puritans as an Origin of Diversity

研究代表者

佐藤 憲一 (SATO, Kenichi)

東京理科大学・理工学部教養・准教授

研究者番号：80548355

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、初期米文学におけるDutch 認識の成立と展開について調査研究を行った。研究の遂行にあたり、本研究は、宗教的purity を希求したはずのピューリタンが、実のところは後の合衆国を象徴する文化的diversity の形成に寄与した、という作業仮説を採用した。この仮説を検証するために、米文学・文化の「ピューリタン起源説」を相対化する昨今の研究潮流の中でさえ看過されてきた、ピューリタンとDutch との関係性に着目し、最終的には両者を俯瞰的に捉える新たな学問的参照枠の確立をした。本研究が完遂されたことにより、初期米文学研究、および、それを基盤とする近現代米文学研究の枠組が更新された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的な意義は、国内外を問わず従来の植民地期アメリカ文学・文化研究ではほとんど取り上げられてこなかった、ピューリタンによるDutch 表象に焦点をあてる点に存する。これまでの植民地期アメリカ文学・文化研究において、他者といえば専らネイティブアメリカンであった。そして、そこで暗黙の前提とされてきたのは、ネイティブアメリカンとピューリタンとの民族的・人種的差異に起因する対立構造であった。本研究は、この単純な図式の陰で捨象されてきたDutch という他者を忘却から救い出し、現今の研究潮流の中に有効的に意義付けることにより、関連研究分野の欠落を発展的に解消しようとすることに成功した。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the formation and development of the recognition of Dutch in the early American Literature. In so doing, it sets working hypothesis that while they are looking forward to making everything "pure," Puritans made substantial contribution to the formation of the diversity of the US, which later symbolizes the nation itself. As a result, I could bring the light on the various facts that was hidden and the critical approach to the newly discovered texts has made it possible to update the framework of knowledge of the early American literature. With this achievements, the mapping of the study of the modern American literature will be ready to change in near future.

研究分野：初期アメリカ文学

キーワード：ピューリタン ジョン・ウィンスロップ オランダ人表象 ウィリアム・ブラッドフォード トランスアトランティック

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

1664年のニューアムステルダム英領編入に際して主導的な役割を果たしたのは、ニューイングランドのピューリタンであった。それにもかかわらず、伝統的なニューイングランド/ピューリタン研究は、ピューリタンと Dutch との関係をほとんど等閑視してきた。例えば、古典的なニューイングランド研究である Perry Miller の *Errand into Wilderness*(1956)から、2011年に改定新版が出版された Sacvan Bercovitch の *Puritan Origins of the American Self* (1975; 2011)に至る当該分野の代表的な成果において、Dutch への言及は皆無である。1990年台初頭から研究開始当初に至るまでの初期アメリカ文学・文化研究が、主としてトランスアトランティックな枠組みを導入することにより、ニューイングランド/ピューリタンという植民地期における地政学的な中心の脱中心化・相対化を推し進めている研究動向において、ニューイングランドとニューアムステルダム、すなわち、ピューリタンと Dutch との関係性をめぐる視点の不在は、大きな欠落と言わざるをえない状況であった。とりわけ近年、Russell Shorto *The Island of the Center of the World* (2005)に代表される新たな研究潮流に即して、ニューアムステルダム/ニューヨークが後のアメリカ合衆国に与えた政治的・文化的意義を再検討する機運が高まっていることを考慮するなら、ニューアムステルダム/ニューヨークという「アメリカ最初の混成社会」(Shorto 300)とピューリタニズムが支配的であったニューイングランドとを、同時に論じ、かつ、俯瞰的に意義付けることのできる学問的参照枠の整備は急務であった。

### 2. 研究の目的

本研究は、ニューイングランドのピューリタンによってその政体の内部に取り込まれた Dutch の他者性が、英領アメリカ植民地の、そして、最終的にはアメリカ合衆国の多様性の象徴として積極的に読み替えられてゆくプロセスに関して、次のふたつの段階に分けて調査研究を行う。まず、第一段階として、移民直後のニューイングランドのピューリタンが他者としての Dutch をどのように認識し、かつ、分節化してゆくかについての調査研究を行う。そもそも初期近代における Dutch とは、社会的・文化的概念であり、これを民族的・人種的観点から定義することは極めて困難である。ならば、ニューイングランドのピューリタンが新大陸において出会った Dutch とはいったい誰なのだろうか。彼らにとっての Dutch は、もともと他者として存在するのではなく、彼らによって「他者」と名指されることで初めて他者として立ち現れたのではなかろうか。そうであれば、ピューリタンによる Dutch 認識には一定の時代的かつ地域的な典型性が見いだされることになるだろう。本研究は、その典型性のありようを、移民直後から 1664 年までの間に書かれたピューリタンの日記類や、主としてロンドンで流通していたアメリカ旅行記の類、さらには、植民促進パンフレット等といった一次資料における Dutch 表象を比較検討することで、あぶりだしてゆく。次に、第二段階として、ニューアムステルダムがその名をニューヨークと改め、ニューイングランドが主導する英領植民地に組み込まれる 1664 年以降、Dutch の他者性がその存在意義に昇華してゆくプロセスについての調査研究を行う。申請者の予備的な調査により、英領植民地の内部に取り込まれた後、Dutch の他者性はかえって一枚岩化してゆくということ、および、Dutch identity が声高に主張されるときには、常にその対抗軸として支配勢力たるニューイングランドが指図されていた、という 2 点が明らかになっている。つまり、1664 年以降 Dutch の他者性は、Dutch を他者として名指したニューイングランドと、他者として名指された Dutch との相互作用によりその輪郭を整えてゆき、最終的には Dutch identity としてポジティブに変換されてゆくのである。こうしたプロセスについて、17 世紀後半から独立前夜にいたるまでの間、主にニューヨークに居住する Dutch の間に流通した、英語で書かれた雑誌や冊子のテキスト、および、主にニューイングランドに居住するピューリタンの手になる日記類の中に見られる Dutch identity をめぐる言説を比較検討しながら浮き彫りにしてゆきたい(その際、1680 年代から移民が本格化する Pennsylvania Dutch の動向にも十全な注意を払うことになる)。以上のふたつの段階の成果を有機的に統合しながら、本研究は、Dutch がピューリタンによって他者として認識され、かつ、その内部に抱合されてゆくことで、後の合衆国を象徴する文化的 diversity の萌芽的な様態が形成されてゆくプロセスを立体的に解明してゆくことが本研究の目的であった。

### 3. 研究の方法

本研究は次の 4 つの作業を軸に展開された。

- (1)ピューリタンによる Dutch 表象の発掘と読解(平成 27~29 年度)
- (2)ニューアムステルダム・ニューヨークにおける Dutch 表象の発掘と読解(平成 27~30 年度)
- (3)植民地期アメリカにおける Dutch 認識の成立と展開に関する理論的整備(平成 28~30 年度)
- (4)上記 1~3 に関するデータベースの整備および WWW 上での公開(随時)

研究の遂行の過程では、学会での研究発表やシンポジウム、ワークショップへの参加を積極的に行い、本研究課題の意義を周知すると共に、他領域・分野の研究者との交流も推進した。

### 4. 研究成果

本研究の作業仮説の蓋然性が確認されたことにより、「他者に比較的不寛容であった」というピ

ユーリタンをめぐるステレオタイプは、根底からの再考を余儀なくされた。より具体的には、合衆国の象徴たる diversity の起源が、Dutch を他者として認識したうえで、その政体の内部に成功裡に取り込んでいったニューイングランド/ピューリタンの政治的かつ修辭的手腕の中にこそ見いだされることになった。その意義は、植民地期米文学研究のみならず、それを基盤とする近現代アメリカ文学研究の枠組みをも、大幅に更新しうる波及性をもつと自負している。

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

- (1) 佐藤憲一「『白鯨』と王立協会的知の枠組み」(Sky-Hawk 33号 日本メルヴィル学会編 21頁-34頁 2018年12月) 査読有
- (2) Kenichi SATO. “Enlightening the Blind: *Ormond; or, the Secret Witness* and the Representation of Cataract Surgery in the Early Republic.” (*Trans-Humanities*, vol. 9, no.1, Ewha Woman’s University Press, pp. 85-103) March 2016 査読有
- (3) Kenichi SATO. “How to Make American Curiosity: A Transatlantic Transaction concerning the “Curiously contrived stellar fish.”(『東京理科大学紀要 教養篇』第47号 51頁-62頁) April 2015 査読有

〔学会発表〕(計2件)

- (1) 佐藤憲一「『白鯨』と王立協会的知の枠組み」(於専修大学 日本メルヴィル学会大会シンポジウム) 2017年9月
- (2) 佐藤憲一「語源学的転回: *Moby-Dick* はなぜ “Etymology” から始まるか」(於京都大学 日本アメリカ文学会 第54回全国大会) 2015年10月

〔図書〕(計1件)

- (1) 佐藤憲一、他、『危機の時代の文学(仮題)』、2019年9月(出版決定) 春風社。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等  
なし

## 6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。